

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第六話 モダンなお嬢さん

「こんばんは」教授がそう言って、わたしの手を握り締めた。

「いいお天気ですね。たった今、森のパーティーから戻ったところなんですよ。皆さんにトロンボーンを吹くようにせがまれましたね。ところで、松の木がトロンボーンと相性がいいってことご存知でしたか。これはフランクフルトで管楽器についての講演をしたときにも言ったことなんですけどね、トロンボーンで強い音をずっとひびびっている、松がかすかに共鳴するんです。あの、奥様、ちょっとお隣によろしいですか？」

教授は上着のポケットから白い紙包みを引っ張り出しながらベンチに腰を下ろした。「さくらんぼです」教授は嬉しそうに笑った。

「トロンボーンを吹いた後はさくらんぼに限りません。唾液が促進されますからね。グリーグの『我、汝を愛す』を吹いた後なんかは特にこれがないと。音を引っ張っておかなくてはいないところがいくつもでてくるので、のどがトンネルみたいに干上がってしまふんですよ。あなたもおひとついかがですか？」

教授はわたしの目のまえで紙包みを揺らした。

「せっかいですけど、眺めているだけにいたしますわ」

「おや、そうですね」教授は両手を空けるために、足首を交差させ、さくらんぼの入った紙袋を膝のあいだにはさんだ。

「遠慮なさるお気持ちにはよくわかります。優雅なるものを求めるご婦人特有の慎みってところですよ……それとも、虫を怖がっていらっしゃるのかな。さくらんぼには虫がつきものですからね。前に大学の同僚と面白い実験をやったんですよ。二人して上等のさくらんぼを四ポンドほどかじりましてね、虫がいるかどうかを調べたんです。ええ、やっぱり虫のいないのは一つもありませんでした。あとでその友人にもいったんですけど

つまり、自然を生かすには、自然をありのままに受け入れるだけの強さを持たなければならぬんだと。おっと、すいません、なんだかつまらない話になってしまいまし

たね。こんなふうにご婦人と打ち解けてお話しする機会がめったにないものですから、
ついい気になつて」

わたしは教授をほほえましく見つめた。

「ほら、こんなに大きなのがありましたよ」教授は嬉しそうに声を上げた。「これ一つ
で口の中がいっぱいになりそうだ。時計の鎖につるしたくなるほどみごとですね」教授
は果肉を飲み込むと、口の中に残った種を思いきり遠くへ吹き飛ばした。種は小道を
こえて花壇の方まで飛んでいった。教授はこの芸当がたいそう「自慢のようだった」。

「いままでも、このベンチに坐つてずいぶんたくさん果物を食べましたよ」教授はた
め息まじりに言った。「杏でしょ、桃でしょ、それにさくらんぼ。あの花壇はきつとそ
のうち果樹園になりますよ。そしたらどうぞお好きなだけ食べてください。代金はいり
ませんから」

わたしは控えめにお礼を言った。

「そういえば」教授が指で鼻の横をたたいた。「夕食の後に、支配人がわざわざ
一週間の請求書をよこしてきましたね。まったく恐れ入りましたよ。こんなことだれ
が聞いたつて信じるものですか。実は、わたしは生来寝つきが悪いほうでして、毎晩
寝る前にほんの少しだけ牛乳を飲む習慣があるんですけど、なんとその牛乳代を料金に
追加してきたんですよ。ええ、もちろん払いませんでしたよ。しかし、たいへんなのは
これからです。今夜から牛乳を当てることができなくなるんですから。おかげで、
牛乳に抱いていた今までの穏やかな感情が、木っ端微塵に砕け散ってしまいましたよ。
支配人ほどの金持ちが、こんなけちな真似をするんですからね。腹が立つたらありや
しない。どうかお休みになる前にわたしのことを思い出してください」教授は空になつ
た袋をかかとで踏み潰した。「あなたが眠りに落ちるころ、わたしがこれまでにない
ほどつらい思いをしているということだね」

二人のご婦人がペンションの入り口に姿を現した。腕を組み、階段の上から前庭を眺
めている。一人はしなびた感じの老婦人で、ピースのついた黒いドレスに絹の袋を提げ
ていた。もう一人は若く、すらりとしたからだに白いドレスをまとっている。藤色のス
イトピーが黄色い髪に形よくおさまっていた。

教授は足を引いて姿勢を正すとチョッキを下に引つ張った。

「ゴドウスカ家の方々だ」教授はそうつぶやいた。「ご存知ですか？ あの人たちはウ
ーンからお見えになった母娘さんです。お母さんの方にやら内臓の疾患があると
か。お嬢さんのソニアさんは女優をしておいでなんですよ。当世風な考え方をなさる方
で、ああそうだ、あなたとは気が合つかもしれませんね。今はああしてお母さんに付き
添つておられますが、なかなか情熱的な人ですよ。前にあの人を評して、花飾りをつけ
たトラのようだとサイン帳に書いてあげたことがあるくらいです。ちよつと待つてて
もらえますか？ 紹介して差し上げますから」

「あ、そろそろ部屋に戻りませんと」わたしは言った。しかし、教授はわたしを押し

とどめるように人差し指を振った。

「だめだめ、いいですか、今までわたしとおしゃべりしておきながら、お二人が現れたとたん、あなたただけあわてて部屋に戻ったりしたらなんだか変じゃありませんか。あなたにだってそれくらいのことはおわかりになるでしょ。」

私は肩をすぼめた。そして、教授の話聞きながら、ゴドウスカ母娘が芝生を横切つてこちらにやつてくるのを片方の目で追っていた。教授が立ち上がると二人は足を止めた。

「こんばんわ」ゴドウスカ夫人が震える声で言った。「いいお天気ですわね！ とはいつても花粉症のわたしにはいくらかこたえますけれど」

ソニアさんは何も言わなかった。未来の果樹園に咲いているバラの上に身をかがめ、ひどく大げさな身振りでその手を教授に差し出した。教授はわたしを紹介した。

「こちらが前にお話したイギリスのお友達です。ここにお見えになるのは今回が初めてだそうです。今、一緒にさくらんぼを食べていたんですよ」

「お目にかかれて嬉しゅうございますわ」ゴドウスカ夫人が細かい声で言った。「お姿は部屋の窓からよくお見かけしておりましたのよ。ねえ、ソニア」

ソニアさんは射抜くような眼差しでわたしを見てから、さっきの大仰な挨拶を繰り返した。わたしたち四人は並んでベンチに腰を下ろすことにした。列車の中で、発車の笛が鳴るのを待っている乗客のように、どことなく落ち着かない気分だった。

ゴドウスカ夫人がくしゃみをした。「花粉のせいかしら」夫人はハンカチを求めて絹の手提げ袋を探った。「それとも夜露のせいかしら。ソニア、夜露はもう降りていて？」

ソニアさんは空を仰いだ。目は半ば閉じられている。「いいえお母さま、顔が冷たくならぬもの。あら、あれを「らん」になって、教授。ほらあそこ、すずめが飛んでいるでしょ。日本的な思想が群れになって飛んでいるよつじゃありません？」

「え、どこ？」教授が声を上げた。「ああ、いたいた。調理場の煙突のそばですね。だけど、あれがどうして『日本的』なんですか？ ドイツ的な思想が群れになって飛んでいると言ったっていいような気がしますけどね」教授がわたしの方を向いて言った。「イギリスにもすずめはいるんですよ？」

「ええ、季節にもよりますけれど。でも、イギリスではそういう象徴的な意味合いはありませんわ。ドイツでは」

「わたしはイギリスには行ったことがありませんけど」ソニアさんがさえぎった。「知り合いならたくさんおられますのよ。でもみんなぞっとするほど冷たい人たちばかりだわ」ソニアさんは身体を振るわせた。

「あの人たちには人間の血なんか流れていないのよ」ゴドウスカ夫人が言った。「魂も、思いやりも、優雅さもない人たちですもの。ですが、布地だけはないませぬね。二十年ほど前に、ブライトンで旅行用のマントを買ったことがありますけど、いまだにしつかりしておりますから　ほら、おまえの湯たんぼを包んでいるあの布のことよ、ソニ

ア。亡くなった主人、ええ、この娘の父親のことですけれど、それはもうたいしたイギリス通でしたのよ。でも、イギリスを知れば知るほど『あの国は生暖かい肉汁に浮かんでいる牛肉の塊のようなものだ』なんて申しておりましたわ。それにしても、こんなうまいたとえが他にありませんから？　ねえソニア、おまえも覚えておいてはよ。」

「ええお母さま、わたしは一度耳にしたことは決して忘れないもの」「ソニアさんが答えました。」

教授がすかさず言った。「お嬢さん、それでこそ女優さんだ。しかしどっちなんですよ、ねえ　　実に悩ましい問題なんですけど　　記憶は神の恵みなのか　　それとも、ちよつと言葉は悪いが　　呪いなのか」

ゴドウスカ夫人は遠くに眼をやったまま、唇をゆがめると顔をくしゃくしゃにして泣き出してしまった。

「これはしたり、奥様、何かいけないことを申しましたでしょうか？」教授が声を上げた。

ソニアさんは夫人の手をとった。「お母さま、お夕食には煮込んだ人參とナッツのタルトがでるそうよ。そろそろ食堂に行きましょうか」「ソニアさんはそう言ってから、恨みがましい目でわたしと教授をにらんだ。

わたしも二人の後から芝生を横切り階段を上った。「あの人は本当に素晴らしい夫だったのよ」「ゴドウスカ夫人がぶつぶつ言っている。ソニアさんは空いているほうの手でスイトピーの「髪飾り」を直していた。

『ガトリックの恵まれな子供たちのための「コンサート」』

午後八時三十分よりサロンにて

主な出演者

ウィーン在住のソニア・ゴドウスカ嬢、ウィンドバーク教授とトロンボーン、
ウィールド教諭夫人、他

この予告は、食堂に飾ってあるうつろな目をした鹿の首に結ばれていた。紅白の縞模様染めた胸当てのような恰好で、「コンサートが始まる数日前から鹿の頭に彩を添えていた。以来教授は、この鹿の前を通るたびに「よく召し上がりますなあ」とおどけた様子で頭を下げるのだった。わたしたちはこの冗談にうんざりして、お客を喜ばせるのが給仕の仕事とばかりに、お愛想笑いは給仕に任せておいた。

コンサートの当日になった。既婚の女性たちは、布を張った椅子のような恰好でサロンに繰り出した。未婚の女性たちは、モスリンの鏡台掛けのように、だらりと垂れ下がったドレスを着ている。ゴドウスカ夫人は手提げ袋の真ん中と、胸の前に渡したショールの襜の上にバラの花をさしていた。ショールは白く、まるで椅子カバーでもかぶっているように見えた。紳士たちは黒い上着に白いネクタイをしめている。ボタンホールに

挿したシダのような花が顎の辺りをくすぶっていた。

サロンの床は磨き上げられ、椅子や長いすが整然と並べられていた。天井には小旗を結んだ紐が一本渡してあった。風にはためく洗濯物といった風情で、どこからか入ってくる風に揺れていた。わたしの席はゴドウスカ夫人の隣だった。ソニアさんと教授は、出番が終わり次第わたしたちのところをやってくることになっていた。

「そうすればあなたも演奏したような気分になれるでしょう」「教授が愛想よく言った。「イギリス人がもう少し音楽的であればいいんですけどね。いや、かまいませんよ。今夜はちょっとしたものをお聞きかせできるでしょう。リハーサルでいるんな才能を発見しましたから」

「ソニアさんは何をなさるの？」

ソニアさんは髪を後ろに振り払った。「その時にならないとわかりません。ステージに上がって少しすると、ここところが何かに打たれたように、突然感情がわきあがってきて」「ソニアさんは襟に止めてあるブローチに手を当てた。「そして……言葉が出てくるんです！」

「ソニア、ちょっとかがんでごらんさい」「ゴドウスカ夫人が小声で言った。「スカートから安全ピンがのぞいているわよ。外に出て留めなおしてあげましょうか、それとも自分でできる？」

「もう、お母さまったら。よけいなことおっしゃらないで」「ソニアさんは赤くなって怒った。「わたしが今どんなに神経質になっているかわかっていらっしやるでしょ……そんなこと言われるくらいならスカートが脱げてしまったほうがましだわ」

「ソニア　なんてことを……」

開演のベルが鳴った。

給仕が出てきてピアノのふたを開けた。サロンの熱気にあおられたのか、腕にかけていた薄汚れたテーブルナプキンで鍵盤の上をパタパタやっている。やがて教諭夫人が若い紳士を従えて軽やかな足取りで登場した。若い紳士は二度鼻をかんでから、ハンカチをピアノの中に放り投げた。

あなたが愛をくれないことはわかっているわ

忘れな草をくれないことも

愛も、心も、忘れな草もくれないことを……

教諭夫人が歌った。その声は夫人のものではなく、どこかに置き忘れた指貫から漏れてくるような音だった。

「まあ、なんて美しい、なんで繊細な声でしょう」「わたしたちはそう言いながらも、どこかほっとしたように拍手を送った。教諭夫人は、「ええ、もちろんですわ」と言わんばかりにお辞儀をすると、舞台の袖に消えていった。若い紳士は夫人のスカートを巧み

にかわしながら、世にもいやな顔をしていた。

ピアノのふたが閉じられ、舞台の中央に肘掛け椅子が置かれた。ソニアさんが肘掛け椅子に向ってゆっくりと歩いていく。一瞬間があった。この時矢が飛んできてソニアさんの襟のブローチに当たったのだらう。ソニアさんは口を開いた。そして、裾を引いたドレスではなく、できるだけ軽やかな服装で森へ行き、自分といっしょに松の落ち葉の上に寝転びまじょう、と心を込めて訴えた。ソニアさんの大きな声が、いくらか耳障りなほどサロンに響き渡った。ソニアさんは椅子の背もたれに腕を預け、手首から先をぶらぶらさせている。わたしたちははらはらしながらその姿を見守った。教授はわたしの隣で口ひげをいじりながら食い入るように見つめている。ゴドウスカ夫人は、子供自慢の親によくある、あの平然とした態度で娘の姿を眺めていた。給仕が一人、つまらなそうな様子でサロンの壁によりかかりながら、「非番」であることを見せつけるように、プログラム用の角でつめの掃除をしていた。

「わたしの言ったとおりでしょ」教授は喝采のなかで叫んだ。「実に情熱的だ！ ソニアさんは百合の花の芯に宿った炎のような人だ。おかげで、わたしにもいい演奏ができそうな気がしてきましたよ。次はわたしだ。やあ感動しましたよ、ソニアさん」大きなショールを肩にかけたソニアさんが青白い顔をして戻ってきた。「あなたはわたしの靈感です。今夜はあなたのためにトロンボーンを吹かせてもらいますよ」

右の人も左の人も、身を乗り出すようにして、ソニアさんの耳元に賞賛の言葉をささやいた。ソニアさんはまた例の大仰な挨拶を繰り返した。

「いつだってうまくいくのよ」ソニアさんがわたしに言った。「だって、演技をしているのが本当のわたしなんですもの。ウィーンでイプセンをやったときなんか、持ちきれないほどたくさんのお花束をもらったのよ。コックにまで分けてやったわ。こんなところじゃ何をやってたかったらいいことにはならないけれど。ここにいると神秘的なものがまったく感じられないもの。あなただってそう思うでしょ？ ウィーンだと、観客の魂からなんともいえない神秘的な香りが立ち上ってくるのよ。そう、目に見えるほどはつきりね。わたしの魂はあの香りに飢えているんだわ」ソニアさんは前かがみになると、手のひらにあごをのせて「飢えているんだわ」と繰り返した。

教授がトロンボーンを持って舞台に現れた。吹き口に息を吹き込んでから片方の目の前にかざし、シャツのカフスを上着の中にかくし込むとソニアさんの魂に浸りこんだ。聴衆は沸き立ち、ババリアン・ダンスがアンコールされた。とはいっても、教授に言わせると、ババリアン・ダンスは芸術性よりも、息継ぎのテクニクが求められる楽曲だそうだ。ゴドウスカ夫人はトロンボーンに合わせて扇でリズムをとっていた。

教授が引っ込むと、さっきの若い紳士が出てきて、「熱い血潮に胸を焦がしながら」誰かを愛するとうようなことをテノールで歌った。その次がまたソニアさんで、お母さまから借りてきた薬ビンを使って、長椅子の上で毒を飲む場面を演じた。続いて若い娘が安物のヴァイオリンをこすって子守唄を弾き、最後に教授が、恵まれない子供たち

に捧げる国家を演奏して、この日の儀式はお開きとなった。

「そろそろ母を寝かせるわ」ソニアさんが小声で言った。「そのあと少し散歩をするつもりなの。外気に触れて魂を解放したいから。駅まで行って戻ってくるだけなんだけれど、もしよかつたら、あなたも一緒にいかが？」

「ええ、喜んで。お支度ができたらわたしの部屋のドアをノックしてください」
ソニアさんとわたしは星空の下を歩いていた。

「なんて美しい夜でしょう！」ソニアさんが言った。「古代ギリシャのサッフォーの詩をご存じ？ 星くずの中に自分の手を見つけたっていう……わたしがつくづく自分がサッフォーに似ていると思うの。うつん、サッフォーに限らず、偉大だといわれるあらゆる作家に親近感を覚えるといったほうがいいかもしれないわ。彼らの作品、とくに書簡を読んでいると、なんていうのかしら、その中に自分の姿とつか、自分の一部を見るような気がするの。そう、暗い鏡の中に自分の手がいくつもいくつも映っているように」

「でも、厄介な話ね」わたしが言った。

「厄介ですって？ わたしの才能が仇になっているとでも……」ソニアさんは黙ってわたしを見ていた。

「あなたにわたしの悲劇がわかる？」

わたしは首を振った。

「悲劇の元凶は母よ。母との生活は、報われない願いの詰まった柵と暮らすようなものだよ。さっきの安全ペンのごと覚えているでしょ？ あなたからみたらなんでもないことかもしれないけれど、あの一言のおかげで、出だしの演技が三つもだめになってしまったわ。あれが」

「安全ペンに出鼻をくじかれたってわけね」

「そう、そのとおり。ウィーンにいたって振り回されっぱなしよ。無性に乱暴なことをしたくなることがあるわ。そんな時決まって母は言うの。『その水薬をかきまぜてからにしてちょうだい』って。いつだったか、わたしカッとなって窓から水差しを投げ投げたことがあるの、そうしたらなんて言ったと思う？ 『ソニア、そんなものを窓から投げるのはおやめなさい。投げるのだったら』」

「もつと小さな物？」わたしが後を継いだ。

「いいえ、『投げる前にひとこと言ってちょうだい』ですって。もつやっつられないわ！ お先真つ暗よ」

「旅回りの劇団にでも入ったらどうかしら？ お母さまはウィーンに残して」

「まあ、なんてひどいことを言うの！ 夫に先立たれた病身の母親を一人きりにして行けると思う？ そんなことをするくらいなら死んだほうがましよ。わたしはこの世で母だけを愛しているのよ。ええ、母だけをね！ あなたは自分の不幸を愛することができると思う？ ほら、ハイネの言葉に『深いかなしみがささやかな歌を生み出す』って

いつのがあるでしょ、わたしもあれとおなじ心境ね」

「だったら問題ないじゃないの」「わたしは陽気に言った。

「いいえ、それがあるのよ!」

わたしはペンションに戻ろうと言った。ソニアさんとわたしは来た道を引き返した。「結婚すればすべてが丸く収まるような気がする」ともあるわ」「ソニアさんが言った。「わたしを崇拜してくれて、素朴で穏やかで、母の面倒もちゃんと見てくれる人がいたら、結婚を考えてみようかしら。しょせん男なんてわたしにとっては枕のようなものだし。だって、才能のある人間がまともな結婚なんて望んだって無理でしょ。あなたも気がついていないはずよ、教授がわたしにひどく気を使ってくださっていること」

「そうよ、ソニアさん」わたしは嬉しくなって言った。「あなたのお母さまがあの方と結婚なさればいいのよ」わたしたちは美容院の前を通り過ぎようとしていた。ソニアさんがいきなりわたしの腕をつかんだ。

「あ、あ、あなただったら」ソニアさんはどもりながら言った。「あんまりよ。なんだかめまいがしてきたわ。わたしが一度も結婚しないうちに、何でお母さまが再婚しなくちゃいけないの。ああ、失神しそう」

「だめよ」わたしはあわててソニアさんをゆすった。「失神するならペンションに帰ってからにしてちょうだい。ここじゃだめ。お店はみんな閉まっているし、だれも歩いていないもの。ねえ気を確かに持って!」

「ここよ、ここじゃなきゃいやよ!」ソニアさんは足元を指差すと音もなく優雅に崩れ落ちていった。そして動かなくなつた。

「しょうがないわねえ!」わたしが言った。「お願いだから早く目を覚ましてちょうだい!」しかし動く気配はまったくない。わたしはペンションに向って歩き始めた。振り向くたびに、美容院の前でうつぶせに横たわるソニアさんの黒い影が見えた。わたしは駆け出していた。そして教授を部屋から連れ出した。「ソニアさんが失神してしまつたんです」

「なんですって! 場所はどこです? いったい何があつたんです?」

「駅前通にある美容院の前ですわ」

「神様、マリア様! 水はあるんですか?」

教授は水差しをつかんでいた 「誰

もそばにいないんですか?」

「ええ、だれも」

「上着、上着はどこだ。ええいもついい! 風邪なんてかまっていられるか。いくらだつて引いてやる……さあ、いっしょに行つてくれますね」

「いいえ」わたしは言った。「わたしより給仕をお連れになつたほうが……」

「そんな殺生な、ご婦人にいてもらわなければどうにもなりませんよ。男のわたしに「ルセットをはずせておっしゃるんですか」

「あれほどモダンな方ですもの、「ルセットなんかつけているはずがありませんわ」

教授はわたしを押しのとどたばたと階段を下りていった。

翌朝食堂へ下りていくと席が二つ空いていた。ソニアさんと教授が森に出かけていたのだ。それも丸一日の予定で。

いったいどういふこと？